



# 婚活支援事業における自治体の役割 : 兵庫県加西市 と兵庫県多可町を事例に

伊藤, 優季

---

(Citation)

兵庫地理, 60:29-45

(Issue Date)

2015

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003890>



# 婚活支援事業における自治体の役割

## —兵庫県加西市と兵庫県多可町を事例に—

伊藤 優季

### 1. はじめに

現在の日本では、ライフコースの多様化や非正規雇用の増加、また異性とのコミュニケーション能力の低下や異性との出会いの場の減少など、多くの要因が絡み合っ、未婚化、晩婚化が進んでいる。日本においては、かつては皆婚の意識が強く、人生の流れの中に組み込まれているという意識が当たり前であった。しかし、現在となつては未婚率が上昇しており、国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」(2013)の生涯未婚率の年次推移調査によると、1980年における生涯未婚率が男性 2,60%、女性 4,45%であったのに対し、2010年では男性 20,14%、女性 10,61%まで上昇している。生涯未婚率とは、45～49歳と 50～54歳未婚率の平均値から、50歳時の未婚率（結婚したことがない人の割合）を算出したものであり、生涯独身でいる人がどの程度いるかを示す指標である。

そのような背景の中、各地方自治体において結婚を支援する動きが 2001 年以降活発になり始めた。現在結婚支援事業を行っている市町村は、内閣府『平成 22 年度結婚・家族形成に関する調査報告書』(2011)の地方自治体や NPO・団体への結婚支援の取り組みに関する調査によると、32,5%であり、半数以下にとどまっているのが現状であるが、年を重ねるごとに結婚支援を行っている地方自治体は増えており、今後も増加することが予測される。さらに、結婚活動、いわゆる“婚活”という造語も生まれ、またテレビ番組でカップルをつくるお見合い番組が放映されたり、ニュースで特集が組まれたりなど、“結婚すること”に関して注目が集まっているといえる。“婚活”とは、『AERA』2007年11月5日号において山田昌弘が提唱した造語であり、結婚するための活動を略したものである。そのような中、地

方における婚活支援事業への取り組みが近年目立っている。現在行われている婚活イベントは、それまでの単なる地元のお店を使った食事会や、お見合いイベントで留まることのない、発想豊かなユニークなものが民間企業だけでなく、行政である自治体によつても行われるようになった。

その例として、岡山市の「鬼ごっこ婚活」、埼玉県宮代町の「畑で婚カツ」、京都では京都市長が“学園 PTA 会長”として参加する「学園婚活」などが挙げられる。また、地方自治体を対象とした「町おこし婚活支援サービス」を開始した婚活サービス会社も存在する。

なぜこのように地方自治体が婚活支援事業に必死になっているのだろうか。それは、「どうしても自分の地域に人を呼びたい」「人口減少を食い止めたい」という危機感や意識の強さがこういった近年における地方の婚活支援事業の活発さに表れていると考えられる。しかし、現在においてはどこも同じように婚活支援事業を行っており、なかなか自分達の地域に人を呼ぶことは難しい、さらに定住となればなおさらである。これに関して、自治体による婚活支援と、その地域に合った支援のあり方が上手にかみ合っていないということがひとつの要因として考えられる。

そこで、今後の婚活支援事業においてどのような取り組みが必要なのかについて本論文で考察したい。本論文においては、現在婚活支援事業に力を入れて取り組んでいる 2 つの地域を取り上げ、実際に地域で行われている支援事業と結婚や移住動向との関連を考察することで、その地域に合った婚活支援事業とは何かということ、また、婚活支援事業において自治体が果たすことのできる役割について考察することを目的とする。

研究方法は、文献調査、兵庫県加西市、兵庫県多可町、ひょうご出会いサポートセンターへの聞き取り調査、加西市・多可町に住む女性へのアンケート調査、婚活イベント（恋愛講座、カップリングパーティ）にスタッフとして参加し、観察を行う方法を用いる。

対象地域の選択理由は、加西市、多可町ともに結婚支援事業に力を入れて取り組んでおり、その取り組みがメディアに取り上げられているということ、また両者を比較すると、加西市は都市、多可町は農村の特徴をもっており、また、地域住民の結婚に関する考え方や人間関係の在り方が対照的であるためである。

加西市、多可町の位置は以下の図の通りである。



第1図 加西市と多可町の位置

## 2. 日本における結婚・出会いの変容

### (1) 生涯未婚率、結婚スタイルの変容

日本における生涯未婚率については、国立社会保

障・人口問題研究所「人口統計資料集」(2013)の生涯未婚率の年次推移調査によると、1985年以降の男性の増加が激しく、2010年の時点では、5人に1人は結婚をしたことがない状況であるといえる。女性は、まだ男性に比べて増加の割合は少ないが、それでも10人に1人は50歳の時点で結婚したことがない状況にあると言える。これは、先ほどの生涯未婚率の年次推移調査結果によると、1950年時に比べると60年の間で、男性はおよそ20倍、女性はおよそ10倍と生涯未婚者が増えているという結果になっている。この状況を見ると、今後も生涯未婚率は上昇していくであろうと予測できる。また、それぞれの年齢別に見ても、未婚である男性、女性の割合が増えていることが読みとれる。特に、女性の25～29歳の未婚率については、1970年以降、急激に上昇しており、かつては10人に2人が未婚であったのが、2010年においては、10人に6人、半数以上が未婚である状態であるといえる。

次に、日本の結婚スタイルの変化についてであるが、大きく分けて見合い結婚・恋愛結婚の2種類に分けることができる。

見合い結婚とは、世話人と呼ばれる第三者(親戚、近所のおじさんやおばさん、友人、職場の上司など)が、男女の間に入って縁を結び、結婚を行う結婚のあり方である。特に戦前の日本では、結婚は家を存続させるための、家と家の結婚という側面が強く、結婚の決定権は本人達にあるといえども、本人達の意味は考慮されにくい傾向にあった。しばしば、親同士がそれぞれの子どもの結婚を決めた上で、いわゆる「取り決め婚」が行われることも少なくなかった。

恋愛結婚とは、結婚するまでの過程に恋愛を経て結婚するという結婚の形である。この恋愛結婚と切っぴつが離すことが出来ない概念が、ロマンティック・ラブ・イデオロギーである。山田(2010)によると、ロマンティック・ラブ・イデオロギーとは、純粋な男女の一对一の愛着関係、性関係によって結ばれるものであり、一生その運命の相手と連れ添う関係であるということが理想とされる近代に特徴的な社会

規範のことである。このロマンティック・ラブ・イデオロギーが次第に浸透することによって、戦後の恋愛結婚の数の増加につながった。

これらふたつの結婚は、戦後をきっかけとし大きく数が増えた。第14回出生動向基本調査の『結婚と出産に関する全国調査』(2011)、結婚年別にみた恋愛結婚と見合い結婚の推移のデータによると、1930年から1940年の間は、見合い結婚が恋愛結婚に比べ多かったが、第二次世界大戦が終了した1945年を機に見合い結婚が減少をはじめ、それに対し恋愛結婚が増加していった。これは、戦後に民法によって結婚の成立要件が、当事者間に結婚の意思があることや、結婚年齢が男子18歳以上、女子は16歳以上であることが決められたこと、先ほど述べたロマンティック・ラブ・イデオロギーが次第に浸透することによって、恋愛の延長線上に結婚があるという認識が生まれたことなどによるものであると考えられる。このような認識が広まるとともに、世話人の役目を担う第三者の介入も減少し、それに伴い見合い結婚も減少していった。

そして、第14回出生動向基本調査の『結婚と出産に関する全国調査』(2011)、結婚年別にみた恋愛結婚と見合い結婚の推移のデータによると、1965年には、両者の数が逆転し、その後現在に至るまで、恋愛結婚は増加、見合い結婚は減少している。2000年には、恋愛結婚87.2%、見合い結婚6.2%とおおよそ14倍もの差がでている。このような変化があり、現在の日本では、男女の恋愛を前提とした恋愛結婚が一般的な結婚のスタイルになっており、見合い結婚はあまり見られなくなっている。

以上のように、日本の結婚・出会いの変容を時代ごとに、現在の結婚を取り巻く状況としては、未婚化・晩婚化率が上昇し、少子化の要因となっていることが大きな問題となっている。

一方で、国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」(2013)における未婚者の生涯の結婚意思に関する調査では、結婚願望のある、いずれは結婚するつもりである若者の割合は、2010年では約90%前後の若者がいずれは結婚するつもりである

と答えており、1982年の調査時に比べてあまり変化していないのが現状である。このような結果が出ているにも関わらず、結婚するつもりではあるが結婚していない、あるいは出来ない男女が結婚出来ない要因はどこにあるのだろうか。これには、「出会いの機会がない」ということが要因として挙げられる。かつてのように誰かが縁談を持ってきてくれて結婚相手と出会ったり、職場や友人のつてなどで自分に合う人を自然に見つけたりすることが難しくなってきたのである。加えて、現在では単に気の合う人に出会ったら結婚するのではなく、自分の納得する条件(経済力・ルックス・性格・学歴など)に合う人を探すとすると、結婚するまでの道のりが以前に比べて長くなっていると考えられる。

そのような流れの中、結婚するために自ら出会いを求めて行動をし始める人々や、その考え自体が注目を浴びるようになってきたというのが現在の日本の結婚に関する状況であるといえる。

## (2) 婚活の概要

「婚活」とは、山田(2010)によると、「結婚を目標として積極的に活動することを、就職活動に見立てて結婚活動と呼び、それを縮めて『婚活』とネーミングした」と定義している。この単語は、現在私たちの身近なところでも用いられ、様々なところでの出会いイベントの開催、婚活指南書の出版など、いわゆる「婚活ブーム」も起こった。さらには、少子化対策の一環として、内閣府が、地方自治体で行われる婚活イベントの運営に助成金を出すことを検討していることも、明らかになっている。

## (3) 日本における結婚・婚活支援の現状

### ①都市と地方での結婚・出会いの現状

都市の結婚・出会いの特徴は、大都市ほど未婚率が高くなる傾向にあるということである。この要因として、都市の人間は結婚が遅い、結婚できない人々が多いというよりも、結婚に対して時期を急がなかったり、あるいは一生結婚しないという選択肢を選んだりする人々が都市部に集まって来ているということが予測でき、またそういった人々の中で生活するうちにいつの間にか結婚していないという状況の

者もいる。人とのつながりが近所づきあいなどで生まれることも少なく、親戚などの縁故を使つての結婚や出会いは少ないといえる一方で、他者に介入されることのわずらわしさも少なく、自分の自由に生活を行っている人が都市に多いともいえる。

また、都市は女性の就業行動の変容の影響を受け、高学歴の女性が職を求めて都会に集まりやすい。そして、恋愛よりも仕事優先の女性、経済力を持つ女性の数も増えているため、結婚の必要性を感じない女性も増えている。

一方、地方の結婚・出会いは、農村などの地方ほど全体の未婚率は低くなっていく傾向にあったが、最近では特に男性の未婚率が高くなる傾向にある。この傾向は1980年代より、零細農家や地元商店の男性が結婚出来ないという形で表れてきた。いわゆる「嫁不足」である。かつて機能していた、村の制度や規範に沿って行われてきた恋愛や親類を媒介とした見合いなどといった制度的な出会いの場が失われてきたのである。そして、未婚の男性の数が増えている状況の中でも、長男は、イエの後継ぎであるという規範意識が残っている。しかし、女性はそういったイエの規範に縛られる傾向は少なくなってきており、自由に職業を選択し、地元を出て行ってしまふという傾向にある。男性は地元に残り、女性は外へ出ていくという農村の人口移動の構造が、農村部における男女差を生み、また男性が結婚相手に年下を好む傾向にあるのも、嫁不足に拍車をかけている状況であるといえる。

このような都市と地方の状況の中、地方は都市に流出する女性を留まらせるため、また嫁不足を解消するために、婚活支援事業に対して様々な手段を用いて女性を地方に呼び込むのに必死になっているのである。また、嫁不足に悩む地方に嫁ぎたい女性を募集して婚活をおこなうテレビ番組の企画に女性の応募が殺到しており、都会の女性が田舎暮らしを求めて地方に嫁ぎたいという声も増えている中、この機会を逃すわけにはいかないのである。

## ②地方における婚活支援

内閣府『平成22年度結婚・家族形成に関する調

査報告書』によると、地方自治体による結婚支援事業自体そのものは、「婚活」が登場する前から行っていた自治体の方が多い。2010(平成22)年度の時点では、結婚支援事業を行っている都道府県は66.0%、市区町村は32.5%となっている。それぞれの未実施の理由は、予算確保が困難、民間事業の利益の妨げになる、都道府県単位で行っているため、する必要を感じない、過去に実施したものの、成果があがらなかった等が挙げられる。

都道府県、市区町別の結婚支援事業の内訳は、いずれも事業の半数以上は出会い事業である。これは、「出会いの場が少ない」という声を受けての男女の出会いの場の創出や、相談事業や講座よりも参加者が気軽に参加しやすいということ、民間に委託して行うことの出来る事業であるということや、1回の費用が比較的安価で済むということなども考えると、出会い事業を行うメリットやとりかかりやすさの点から、出会い事業の割合が多いということも想定できる。もちろん、「婚活」ブームの影響もあるだろう。

また、出会い事業は「カップルが〇組できた」といったように、成果が見えにくい結婚支援事業の中でも数字として成果を表しやすいという面もあり、取り組みの結果がすぐに分かるという点も出会い事業の特徴である。

行われている支援事業の内容をまとめると、表1のようにまとめることができる。

第1表 取り組まれている事業内容

	事業内容
出会い事業	①出会いイベント事業 地域内外から参加者を募り、パーティや日帰り旅行、料理や共同作業、農業体験などを行い、男女の出会いの場を作る。 ②見合い事業 情報登録した男女に対して、自分の希望する条件に合った人をマッチングさせ、見合いをセッティングす

	るというもの。相談事業と同じ場所で行われている場合が多い。
仲人事業	一般の人からボランティアを募り、男女の間に入って縁を結ぶ仲人の育成を行ったり、仲介を行う人同士のネットワークをつくったりする事業。
経済支援・結婚祝い	地域に居住する男女に対し、助成金や家を建てる時の補助金を給付する。
相談事業	各地域によって異なるが、県民局などに相談事業所があり、結婚に関する相談を行う。結婚に関する情報提供サービスも行っている。
講座	未婚者本人に対して、異性間コミュニケーション能力の向上や、メイク講座、未婚者に対して異性間コミュニケーション能力の向上の講座を行う。

以上、自治体における結婚支援、婚活支援についての概要を述べてきたが、実際にどのようなことが行われているのか、課題はどこにあるのかについて実際の地域の事例をもとに述べていく。

### 3. 加西市における結婚・婚活支援事業

#### (1) 加西市の概要

加西市は、人口 46,323 人（2013 年 12 月 1 日現在）、面積 150.19 平方キロメートルの兵庫県の南部、播州平野のほぼ中央に位置しており、姫路市のベッドタウンとしての機能を持つ。

加西市の人口は、1985 年の 5 万 2,107 人を境に年々減少し続けており、1995 年の国勢調査では、5 万人を切った。以降、加西市は以前の 5 万人まで人口を戻すため、人口増加に向けて様々な施策を行っている。

#### (2) 加西市における取り組み

加西市の婚活支援事業の主体は、加西市役所ふる

さと創造部・ふるさと創造課である。加西市がこの支援に本格的に取り組むようになった契機は、人口が 5 万人をきったことが第一の要因である。

これまでの加西市の取り組みは現在から 10～15 年ほど前にさかのぼる。農村部・漁村部の嫁不足、働いていても時間がなく出会いがないという一般的な地域における課題について、加西市では労働者支援という形で結婚支援を始めたのが発端であり、1993 年に商工会議所に 300 万円を委託すること出会い支援や結婚支援を始めた。

しかし、人口減少に歯止めはかからず、加西市はこれに対して本格的に人口増政策課を設置することになった。その際ふるさと創造課が担当することになったという経緯があり、出会いサポートセンターを作ったことから現在のような婚活支援事業のスタートへとつながっていったのである。

この加西市における出会いサポートセンターは、兵庫県で行っている「であいサポートセンター」の取り組みを取り入れようと、当時の市の方針として設置されたものであった。しかし、予算や効率性を考慮した場合、加西市が真似をただけでは上手く機能しないと担当者は判断し、住民に聞き取り調査、アンケートを行い、新しい機能を加えていこうという方針で加西市の結婚支援、婚活支援事業はすすめられていったのである。

加西市においては、婚活支援事業を「加西市若者主役計画」の中に組み込んで支援事業を行っている。しかしながら、加西市の事業の目標は少子化対策ではなく、かつての 5 万人都市の再生であり、人口増である。これは、担当者が 2012 年 7 月～2013 年 3 月までの人口移動調査を行った結果、女性の転出は結婚によるものと考えられる部分が多いが、他方、男性の転出が際立って多かったという結果を得、たとえ加西市で結婚をしたとしても市から出ていくケースが多い、つまり加西市は「住みやすい町として選ばれない町」ではないかという仮説をたてた。そして、結婚した後に住む場所の候補として入る、あるいは住む場所として選ばれるような、住みやすい地域、環境づくりを現在は目指していると担当者は

語っていた。

加西市若者主役計画とは、若者（主に10～30代）に対して、「であう、くらす、はたらく、まなぶ」をテーマに出会いの場の創出や、企業の支援などの施策をまとめたものであり、若者の夢の実現や地域活性化、定住促進などで人口増をめざすものである。

この計画の基幹は、「若者クローズアップ事業(仮)」であり、そこから枝分かれするように、「であう・くらす・はたらく・まなぶ」の部門に分かれていく。であうの部門は、「ひと出会い協力隊制度、スキルアップ事業、サポーター登録制度、カップリング民活事業、出会い創出官民連携事業」へと枝分かれしてゆき、具体的な事業へとようになっていく。現在行われている婚活パーティ、イベントなどはこれらの事業が組み合わさって行われることも多く、地元の飲食店を使ったカップリングパーティの前に恋愛講座を開催したり、地元の北条鉄道と連携して行う婚活イベントの前に恋愛講座を開いたりするなど、多岐にわたっている。

まず「であう」に分類されている事業に関して、ひと出会い協力隊制度は、カップルを成立させた仲人に5万円を支給するという兵庫県三木市の取り組みを参考につくった制度である。しかし、担当者は「現代では人間と人間の間には適度な距離感が必要であり、その距離を第三者に勝手に縮められると逆に恐怖を感じるのではないか」「しっかり相手の話を聞いて思いやった上で行動できる人ならいいが、助成金目当てに単に男女をくっつけさせるための仲人になってしまわないだろうか」という不安を持っていたため、そのまま三木市の事業を取り入れるのではなく、無償のボランティアとして協力してくれる人を募る形にアレンジされ運営されている。

また、ひと出会い協力隊制度の派生事業として、「住もう会員登録制度」という加西市で居住していきたいと考えている独身男女を対象に登録を行い、結婚をサポートする事業も施行している。住もう会員登録制度に登録すると、①会員向けの恋愛スキルアップ講座、②カップリングパーティなどの出会いの場の情報提供、③ひと出会い協力隊員による恋愛

相談、④会員の結婚や加西市での定住に向けたサポートを受けることができる。

ただし、2013年9月より制度を開始して聞き取りを行った2013年12月5日の時点では、会員はわずか3人で会員数が伸び悩んでおり、会員になることのメリットをつくっていかねばならないという状況である。

スキルアップ事業は、カップリングパーティを行う前に恋愛に関する講座を行うことで、参加者側からすれば自身のコミュニケーション能力のアップにつながり、自治体側からは、カップル成立数が増えやすくするという効果を狙った事業である。担当者が聞き取り調査を行った中で、「講座を開いてほしい」という声を聞いたり、講座後のアンケートの意見を取り入れたりしながら行われている。しかしながら、講座事業は個人の内面に踏み込んでいくものであるために、人権侵害やプライバシー侵害の問題が起こりかねないという側面も合わせてもっている。加えて、「恋愛」「婚活」においては、しっかりとした専門家や講師が見つからないという課題もあると担当者は語っていた。

さらに、婚活支援事業の目に見える成果として、カップリングパーティにおけるカップル成立数が挙げられるが、加西市では、このカップル成立数の落ち込みという課題を抱えており、それに対する策としてスキルアップ講座における斬新な企画を生み出したのが加西市の婚活の特徴である。

加西市が行う恋愛講座の講師は今まで毎回異なっている。第1回は全日本ホストグランプリ初代王者を起用、第2回は美魔女を起用し、結果として各方面から注目を集めた。起用の理由は、「どの分野でも良いので一流の人を呼ぶこと」であった。美魔女とは、2009年ファッション雑誌『美STORY』による造語であり、年齢という言葉が無意味なほどの輝いた容姿・経験を積み重ねて磨かれた内面の美しさ・いつまでも美を追求し続ける好奇心と向上心・美しさが自己満足にならない社交性という条件を備えたエイジレスビューティーな女性を“美魔女”と定義している。

その結果、テレビ朝日やTBS、NHKなどのテレビ局からの取材依頼、放映や産経ニューウエスト(関西WEB版)、yahoo ニュースなどの掲載や新聞社からの取材を受けるなどメディアからの注目も多数あり、また、静岡県、鳥取県、北海道など他県からの問い合わせや他県のブライダル業者から視察の問い合わせがあり、広報としての効果も高かったといえる。このスキルアップ講座については、実際に参加観察を行っているため、後に詳述する。

また、加西市は官民連携にも力を入れ、「サポーター登録制度」、「カップリング民活事業」、「婚活コラボ事業」など多くの取り組みを行っている。その一環として、イベント会場を行政が準備、費用負担を行い、その会場で行う婚活事業と企画を民間から公募するという「婚活コラボ事業」にも2013年11月より着手した。これは全国初の取り組みである。第一弾は北条鉄道の駅と市の地域交流センターを会場とするものであり、2014年2月にはイベントコンサルティング会社とのコラボ事業である「北条鉄道謎解きコン」が、3月にはNPO団体とのコラボ事業である「列車DE婚活」というイベント開催が決定されている。前者のイベントでは、「婚活必勝セミナー」も同日に開催する予定であり、スキルアップ事業を組み合わせたものとなっている。大手流通企業であるイオングループの商業施設とも連携し、婚活イベントの会場提供や、カップル成立の際のプレゼントとしてのギフト券の提供なども行っており、その他多くの市内外企業との連携を行っている。

また、「くらす」においては、婚活イベントでカップルとして成立した男女が婚約した際に、結婚相談所や不動産物件と連携してデートプランの中に物件の見学やブライダルプランの体験などを盛り込み、定住者増をはかるという「かさいデート推進事業」が存在する。

以上、担当者への聞き取りなどから加西市の婚活事業の概観を述べてきたが、実際に行われている婚活イベントの様子はどのような様子であるのかについて、2013年12月22日に行われた恋愛講座、「～恋愛スキルアップ講座～美魔女が教える『恋愛マジック』」とその後にイオンモール加西北条にて行われたカップリングパーティ「FUYUKOI 45×45 婚活イベント in 加西」にスタッフとして参加し、調査を行った。

その結果、テレビ朝日やTBS、NHKなどのテレビ局からの取材依頼、放映や産経ニューウエスト(関西WEB版)、yahoo ニュースなどの掲載や新聞社からの取材を受けるなどメディアからの注目も多数あり、また、静岡県、鳥取県、北海道など他県からの問い合わせや他県のブライダル業者から視察の問い合わせがあり、広報としての効果も高かったといえる。このスキルアップ講座については、実際に参加観察を行っているため、後に詳述する。

第2表 ～恋愛スキルアップ講座～美魔女が教える『恋愛マジック』の概要

開催日時	2013年12月22日(日) 15:00～16:00
場所	イオンモール加西北条
参加費	無料
参加条件	20～45歳の独身女性 ※加西市在住、もしくは加西市での暮らしに興味のある方優先
定員	15名限定
講師	CHAMI(チャミ) レースクイーン、モデル等の経験を経て現在、旅館の経営、アパレルショップの代表などを勤めている。 関西美魔女コレクションでTOP5に輝く。
講座内容	「キュンっつ」とさせる4つの方法 具体的な内容:服装や姿勢、飲み会で座る位置、会話内容、表情、ギャップの出し方、メールの返信をもらうコツ、浮気の防止テクニックなど
主催	加西市ふるさと創造課

FUYUKOI 45×45 婚活イベント in 加西

開催日時	2013年12月22日(日) 17:00～20:00
場所	イオンモール加西北条1F 「ナポリの食堂 アルバータアルバータ」
参加費	男性5000円 女性4000円 ※加西市在住、かさい住もう会員は500円割引
参加条件	20～45歳の独身男女



	※兵庫県在住、女性は美魔女講座がセット
定員	男性 45 名 女性 45 名計 90 名
主催	f m q

#### 当日の進行

15:00	恋愛講座開始
16:00	恋愛講座終了
16:30	カップリングパーティ参加者の受付開始
17:00	プロフィールを記入 カップリングパーティ開始 (90 秒ごとに男性が席を順に移動して一周する自己紹介型のアピール)
19:15	90 秒アピール終了、第一印象の記入
19:30	第一印象での成立カップル数の報告、フリータイムの開始
20:15	フリータイム終了、最終印象の記入・発表
21:00	カップリングパーティ終了

当日は、このような流れで実際に進められていき、最終的には予定時刻よりおおよそ 1 時間ほどの延長となってイベントは終了した。参加した男性については 20 代の参加者が少ないように感じたが、20～40 代まで偏ることなく参加者がいたように印象を受けた。また、参加者の現住地については市内の参加者がおおよそ 3 割であった。参加した女性は友だち同士での 2 人組での参加者が比較的多く、実際の参加者は定員 15 名に対し、26 名であった。

カップリングパーティの前半は、男性が時計回りに席をひとつずつ移動し、90 秒ずつ相手を変えながら会話をしていた。参加男性 43 名に対し女性が 28 名であったため、相手のいない男性参加者 15 名は、自分のプロフィールを書きなおしたりしながら次の順番を待つこととなる。この 90 秒のアピールタイムは、全員行くと非常に時間がかかるものであったが、後に担当者に聞くと、「このアピールを抜く

と、自分から異性に話すことの出来ない参加者から苦情が来るため必ずいれざるを得ない。強制的に話すきっかけをつくらないと異性と話すことが出来ない参加者、特に男性が多い。」とのことであった。プロフィールは、①名前、②出身、③血液型、④年齢、⑤趣味、⑥特技、⑦自己アピールの欄があり、アピール開始時に相手に渡して会話を始めていく。

フリータイムでは、自由に席を移動し好きな相手と話すことができるのであるが、基本的に女性が奥の席に座っているため、男性が好きな相手の場所に移動して話しかけに行くという場合が多かった。また、なかなか意中の相手に話しかけに行くことが出来ない参加者に対しては、スタッフがフォローに入り、相手の席の近くに座らせたり、会話のきっかけづくりを行ったりして男女の間をつなぐ役割をしていた。しかし、スタッフがフォローに入っても、首を振ってただドリンクコーナーの前にたたずんでいる男性の姿や、座る場所が見つからず会場を歩きまわっている男性の姿も見られ、さらにそこに集まった男性同士で話を始める様子も見られた。

フリータイムが終わると、気になる相手を 2 名書く最終記入に移り、最終の結果発表を行い、カップルになった男女はホールケーキと開催店舗であるアルバータでの食事券 5000 円分がプレゼントされた。最終的なカップル成立数は 10 組であり、カップリング率は 35.7%(成立組数÷女性人数×100)という結果となった。

この結果は、前回行われた恋愛スキルアップ講座第 1 弾「頂点を極めたホストが教える究極の恋愛術」の時と比較すると、以下のようにまとめることができる。

第 3 表 イベント成果比較

	第 1 弾 ホストによる恋愛講座	第 2 弾 美魔女による恋愛講座
講座受講者数	46 名	26 名
参加人	男性 43 名	男性 43 名

数	女性 33 名	女性 28 名
カップル 成立数	6 組	10 組
カップリ ング率	18.2% (成立組数 ÷ 参加 女性人数 × 100)	35.7%

以上が、聞き取り調査からイベントへの参与観察によって得ることが出来た、加西市における婚活支援の状況、婚活イベントの実態である。

### (2) 加西市の結婚の実態

加西市においては、既婚女性に結婚の実態に関するアンケート調査を行った。お願いした担当者によって調査対象を無作為に抽出し、市役所、地域包括センター、播磨内陸広域行政協議会事務局より 5 名から回答を得ることが出来た。調査項目は、性別、結婚した時期と出会いのきっかけ、結婚相手選択の観点、現在の居住地選択の理由などである。

アンケート調査の結果からみると、結婚相手との出会いのきっかけは知人の紹介や職場、アルバイトでの出会いといった恋愛結婚によるものが多かった。また、居住地選択の際には、自分や相手の実家、職場に近い場所を選ぶ傾向があると予想することが出来、加西市は買い物や通勤、通学に便利な場であるというイメージを持たれる傾向にあるということも結果より予測できた。

### (3) 小括

加西市における婚活支援事業と多可町における結婚や出会い、居住地選択の傾向についてまとめると、加西市の結婚支援、婚活支援事業の特徴は、大きく 5 つに分けられると考えられる。

加西市の婚活支援事業の大きな特徴は、イベントや企画のインパクトにある。加西市を一躍全国的に有名にした、ホストや美魔女を起用した恋愛講座はその最たるものだといえ、これを機に加西市のことを知った人々も多いと予測できる。また、このような情報をフェイスブックやツイッターなどで継続的に情報公開し、常に加西市が何をしているのかについて全国から知ることができるようになっているこ

とも、「今度は何をするのか？」が知りたくなるような仕組みであるともいえる。

このような支援事業のエンターテイメント性やパフォーマンス性、情報発信力に加えて、婚約中のカップルに対して、新居見学を盛り込んだデートプランやイオンでの家電割引などといった結婚した後のビジョンが見えやすい支援事業も加西市の婚活支援事業の特徴であり、婚活支援事業担当者が地域に必要としている目に見えた選択肢を実現することの出来るものであるといえる。

これらの事業は、少子化対策ではなく、あくまでも人口増を目標とする加西市にとっては、様々な人に加西市のことを知ってもらい、居住地選択の候補のひとつとして選ばれる地域になるという点で有効ではないかと考えられる。

アンケート結果からは、加西市では、結婚後に親と同居するパターンよりも親の住んでいる地域に近いところを居住地として選ぶ傾向にあるため、「住むところは両親の実家や職場も近いしこのあたりがいいのだけれど、どこかいいところはないだろうか」といった人々を地域に取り込んでいくために、ターゲットを絞って支援事業を行い、先ほども述べた目に見えた選択肢をその人の状態に合わせて用意していくことも今後、婚活支援事業を効率的に動かしていくためには有効であるといえる。また、買い物や通勤、通学に便利な場所であるというイメージを持つ人も多く、こういった利便性を加西市周辺に住む利便性の低い地域に住んでいる人々にアピールすることも普段の婚活支援に織り込んでいくことが可能である。

## 4. 多可町における結婚・婚活支援事業

### (1) 多可町の概要

多可町は、人口 22,753 人 (2013 年 12 月 1 日現在)、面積 185.15 平方キロメートルである。現在は、旧町単位で、中区・加美区・八千代区の 3 つの自治区が設置されている。多可町の人口は、過去 10 回分の国勢調査の結果によると、1965 年をピークに、年々減少している。1985 年の調査時までは、比較的

おだやかな減少傾向にあったが、2000年から2005年、2005年から平2010年の間にはそれぞれおよそ1000人減少していることから、毎年町内人口の約20分の1の人口が減少していることが分かる。特に、20～24歳、25～29歳、30～34歳の人口がそれ以下の年齢の子どもの数に比べて減少しており、就職時や大学進学時に、多可町から男女ともに人口が流出している。

## (2)多可町における取り組み

現在の多可町における婚活支援事業は、主に「結婚応援事業」として多可町地域振興課において行われているが、生涯学習課において婚活イベントが行われていたりも、課をまたいで支援が行われている。現在の多可町では、嫁不足、少子化、定住問題、高齢化などの問題を抱えているが、この事業を通して多可町が特に力を入れて取り組みたい課題は少子化対策である。人口が減ることを前提としながらも、その減るスピードがゆるやかになるような策を目指している。「少子化がすすむことは農地の維持や、小学校の統廃合、人口流出、病院の整理など、様々な生活基盤を変えなければならなくなり、そこにお金を使わなければならなくなってしまう。」と担当者は少子化に対する危機感を抱えていた。しかし、婚活支援における具体的な目標は決まっておらず担当者も悩んでいる状況であった。

多可町の婚活支援自体は2003年ごろから行われており、マリッジパーティや神戸でクルーズパーティ、キャンプ、ワークショップなどを中心とした出会いイベント中心のものであった。2008年になると、商工会部員の存続、後継者問題により商工会青年部が出会いイベントや食事会を行うようになり、現在も毎年12月に企画がなされている。

2010年に、多可町が本格的に予算を組んで婚活支援に力を入れ始め、婚活イベントやマナーアップ講座、スキルアップ講座が行われたが、カップル成立率の低さや、講座の参加者の少なさといった課題や参加者募集が広報やホームページに限られる部分からの参加人数の問題などがはっきり表れるようになった。民間企業にイベントを行ってほしいという希

望もあり、地域の民間企業へ助成金制度も設置したが、人口の少ない地方ではなかなかビジネスが成り立たず、民間企業による婚活イベントの企画も困難な状況にあり、多可町の婚活支援は行き詰まりを見せていた。

そのような状況の中、TBS系列放送「もてもてナインティナイン」における、地方の嫁不足に悩む地域に結婚したい女性を全国から募り、その地域の男性と1泊2日でお見合いを行う「お見合い大作戦」の企画に応募したところ、多可町でのイベント開催が決定し、『多可の花嫁 お見合い大作戦』が執り行われることとなった。テレビ放映によって、多可町内は婚活に対する気運が盛り上がっている状況であり、この町内の雰囲気をもどのように維持し、盛り上げていくのが今後の課題であると担当者は語っていた。

2013年2月12日、TBS系列放送「もてもてナインティナイン」番組内において、多可町における『多可の花嫁 お見合い大作戦』の様子が放映された。この企画を通して、多可町の婚活への気運は盛り上がりを見せ、現在もその雰囲気は続いているという。番組内では、多可町は自然豊かで大阪、神戸といった都市に近いことがアピールポイントとなっており、多可町内の男性20名に対し、全国からの参加希望の女性は応募総数636名というその時点での番組最多応募数となる結果であった。しかし、多可町内の宿泊施設の収容人数に限りがあったため、その後、テレビ局による説明会、男性による投票を経て、最終的には98名の女性の参加となった。イベント開催に際して、多可町は参加男性を集めることに苦勞し、20名を集めることに精一杯であった。募集は商工会青年部、地元のケーブルテレビ局のたかテレビ、ロコミなどを通じて行われ、参加男性が集まった。そして、多可の花嫁お見合い大作戦実行委員会が設置され、参加男性の決起集会、テレビ放映の為の男性紹介ビデオ撮影など、準備が慌ただしく続いた。2013年1月19日～20日のイベント実施直前には、参加男性主催のマナーアップ講座をおこなった。参加女性が到着した際の歓迎イベントに

は、地元の吹奏楽団体、よさこいグループ、地元の小学生、婦人会や商工会に対し協力を仰ぎ、当日には約 3000 人が歓迎イベントに来場した。イベントの際にふるまわれた料理や告白タイムの時に使ったブーケ、女性へのお土産など全て多可町の名産品や地元農家によるものであった。

第 4 表 『多可の花嫁 お見合い大作戦』のイベント概要

イベント日時	2013 年 1 月 19 日 (土) ~ 20 日 (日)
テレビ放映	2013 年 2 月 12 日 (火) 3 時間
参加人数	男性 20 名 女性 98 名
1 日目	歓迎イベント お見合い回転寿司 (60 秒ごとに相手を変えるアピールタイム) フリータイムお宅訪問(意中の男性の家に女性が訪問する) 参加者インタビュー
2 日目	女性第一の決断 最終フリータイム 告白タイム お別れ
カップル成立数	15 組

多可町はこのテレビ放映をきっかけとして、カップル成立した男女のみでなく、参加者同士でのつながりによってカップルとなったという婚活を通してのつながりの重要性、番組内で参加男女の世話役となり、悩みを聞いたり、アドバイスをしたり、多少強引ではあれども会話のパイプ役を担っていたコーディネーターの存在の重要性を意識することとなった。そして、婚活支援事業を上手くすすめていくためにそれまで行われていた支援に加えて、大きな 2 つの柱をもとに今後の婚活支援を進めていこうとし

ている。

一つ目の柱は、婚活に関する人々同士のネットワークづくりを行うということである。この事業は「(仮称)多可町婚活ネットワーク協会」というものであり、婚活に携わる人々(地元の町民、独身の男女、行政など)がネットワークを介してつながり、情報交換やイベント実施を行うための核となる予定である。町内の気運を盛り上げ、単なるイベント実施だけに終わらない支援を行い、当事者の意識変革を図りながら、町内に嫁、あるいは婿を呼び込もうという目的を持っており、協会の事業経費は多可町の補助金やその他を財源とし、多可町役場の地域振興課が事務局となっている。ネットワークの部門構成は以下の 3 つとなっている。

第 5 表 (仮称)多可町婚活ネットワーク協会部門構成

イベント企画 運営部門	イベントを企画・運営をする地域住民(おせっかいお兄さん、お姉さん)を想定。
(仮称) 独身クラブ部 門	町内の独身男女および町外の多可町での生活に興味のある独身男女が集まるサークルを想定。
縁結び サポーター部 門	町内独自の結婚相談所窓口開設を目指し、相談員あるいは縁結びサポーターとなる地域住民(おせっかいおじさん、お婆さん)を想定。

以上のように、婚活に携わる人々を部門に分けてそれぞれの事業を行いながらもお互いに情報交換やイベント運営を行っていく仕組みであるし、しかし、この事業はまだ企画段階であり、実際に運営はまだ進んでいないため、成果は見られていない。

二つ目の柱は、婚活を行う男女の間を取り持つ世話人となる、いわゆるおせっかいな人の役割を重視するというものである。テレビ放映を通して多可町は、男女の仲をつなぐコーディネーター、おせっかいな人の役割の大きさに目を向けた。そして、イベ

ントの中心におせっかいなおじさんやおばさんをスタッフとして参加させることで、なかなか異性と会話を始めることが出来ない、コミュニケーションが苦手な人に対して働きかけていくというイベントの在り方で今後は婚活支援を進めていこうとしている。イベント中だけでなく、イベントの後も何かと気にかけてくれるような世話人と参加者の関係を想定している。1回の講座ではなかなかスキルアップすることは難しいという課題に対しての策ともなりえる可能性も秘めているといえるのではないだろうか。

この世話人に関しては、2014年1月19日に「多可町お見合い大作戦」という婚活イベントを実施し、当日は多可町ふるさと創造大学の出会いふれあい専科学生が男女の出会いの手伝いを行い、会場内の設備設営・運営も行った。当日は、男女各15人程度集めて、軽食を挟んで交流コミュニケーションをしつつカップリングする予定であったが、大雪の天候のため当日キャンセルもあり、結果男性12人(32～64歳)、女性7人(28～38歳)の参加であった。カップルは4組成立し、講座生にも達成感と満足感が感じることができ、お節介な婚活活動への関心も大きくなったとの声があった。イベント後は反省会を行い、次年度に向けてテーマも含めて話し合い、行政への提言も行う予定である。地域振興課担当からは、今回スタッフを担った人々が大学の講座を卒業した後も、「ネットワーク協会」に入る形で力を発揮してもらおうと模索途中であるとのことであった。

第6表 多可町の婚活支援事業の展開

①民間婚活事業への助成	婚活サポート事業補助金 ⇒今後も継続
②セミナーの開催	男性マナーアップ、親の為のこころ構え、女子会 ⇒予算化しているが、上手く運営が出来ていない
③支援者の拡大 ④対象者の把握 ⑤イベントの企	『多可の花嫁 お見合い大作戦』を受けての気運を盛り上げるために、婚活に関

画・運営 ⑥縁結びサポート会員 ⑦結婚相談窓口 ⑧当事者グループの組織	するネットワークをつくる ⇒『(仮称)多可町婚活ネットワーク協会』の設置
⑨成婚への誘導	結婚祝い金制度や、カップル成立後の追跡交流会の実施 ⇒予算化しているが、運営は出来ていない

## (2)多可町の結婚の実態

多可町においても、既婚者に対して結婚の実態に関するアンケート調査を行った。お願いした担当者によって調査対象を無作為に抽出し、役場職員、社協職員、商工会職員より男性5名、女性10名から回答を得ることが出来た。調査項目は、加西市と同様である。この調査結果からは、結婚相手の出会いのきっかけは全国的な調査の結果と同様、職場での出会いや知人を通して恋愛結婚に至ったケースが多いが、お見合い結婚や仲人の役割によって結婚に至ったケースも存在する。また、結婚相手選択の際に重要視した要素については、相手の性格を重視する傾向にあり、次いで経済力を男性に求める傾向にあった。結婚相手の人物としての魅力以外に重視したことは、自然環境などの将来住むことになるかもしれない地域に関する希望も見られたが、相手の親との関係を重視したという結果が比較的多く見られた。

居住地選択に関しては、現在結婚して多可町に居住している女性は結婚後も町内での居住地移動のパターンが多く、決定の理由に相手方の親と同居するためという傾向が強いことが分かる。男性の調査結果からも、結婚後も自分の実家にそのまま親と同居したり、二世帯住宅に増築したりするなど、地元で親と住む傾向が強いことが伺える。

## (3)小括

多可町における婚活支援事業と結婚や出会いの特性についてまとめると、結婚相手との出会いのき

かけは職場や知人を通してなどが主であり、結婚相手の選択の際は、相手の性格と相手の親との相性を重視する場合が多いことが分かった。結婚後の居住地選択は、町内や地元といった範囲で行われることが多く、また、結婚後は男性側の親との同居をする傾向が強い。

このような傾向を持つ多可町において、現在のネットワークづくり重視の婚活支援事業、仲人的な役割を担うおせっかいおばさん・おじさんの介入の必要性を意識した婚活支援事業は上手く機能していただくだろうか。これらの事業は、まだ運営の途中、運営前の段階であったりするため、はっきりとした成果がでるのはまだ先となるが、町内において結婚や居住地選択を行う多可町の特性を考慮すると、現時点の多可町に合った婚活支援事業のあり方であると考ええる。2014年1月19日に行われたイベントでは、参加女性の半数以上がカップル成立し、またおせっかいを焼いた側の人も達成感や満足感も得ることができたという結果を得たが、ここで出会った男女当事者だけでなく、スタッフとして参加した地域住民との関わりを持つことでつながりが生まれ、町内での参加者はもちろん、町外からの参加者が今後その地域に入りやすくなるきっかけとなるのではないだろうか。特に、町内同士や地元において結婚相手を見つけている傾向にある多可町においては、より町内の人々との結びつきが強まり、コミュニティ内のつながりが強くなると考えられる。

町内のおじさん、おばさんが、町内の独身男女をつなぎ合わせるという形が多可町の目指す婚活支援のあり方とするならば、そういったネットワークを作りやすくするものが、今後運営されることとなる「(仮称)多可町婚活ネットワーク協会」であり、今後の多可町の婚活支援事業においては、この支援事業のあり方は有効と考えられる。

しかし、この多可町の結婚や出会いの動向や婚活支援事業のあり方は、町外からやってくる人に対するアプローチが弱く、町外の人が入っていきにくい面も持ち合わせているともいえる。地域のコミュニティの基盤を用いて、地元の人々が地元の人々の為

にネットワークを作ってつながり、婚活を支援していくことは、街全体で婚活を支えていこうという町内における団結感や意識は生まれやすいが、一方で、地域として「閉じている」という印象を町外の人からはもたれやすいとも考えられる。そうすると、婚活イベントの参加者が毎回同じ人になってしまったり、顔見知り同士での婚活となってしまう可能性も考えられ、また、おせっかいが上手くいかなかった場合に町民同士の関係がギスギスしたものにならないかどうかについても配慮が必要な点である。この点に関しては、多可町自身が今後の婚活支援事業がどのような形が理想であるのかを明確に示すことが必要である。

## 5. 地域にあった結婚・婚活支援事業と自治体の役割

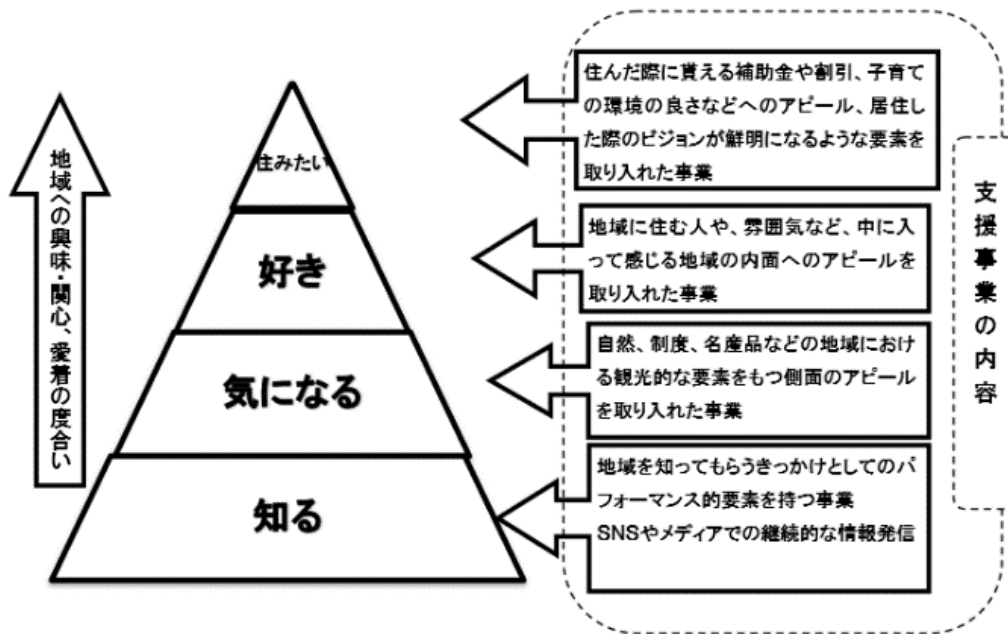
これまでに取り上げてきた地域の事例をもとに、それぞれの地域の支援事業の特徴を取り入れた婚活支援事業のモデルを表す。

また、そのモデルに対して自治体だからこそ出来る婚活支援のありかたを地域、人物（特に男性）それぞれのアプローチに分けて提言し、今後も継続可能な地域にあった婚活支援事業のありかたやその課題について述べていく。

### (1) 事業の特徴から考察する婚活支援事業の4段階モデル

加西市、多可町の婚活支援事業をもとに、婚活支援事業の取り組みを、人々のその地域への興味・関心の度合いの段階別に分けて考察を行った。

一般的な婚活支援事業の目的は少子化対策や人口増加、定住化が目的であるが、最終的には婚活支援事業を通して、その地域に居住する選択をしてもらうことが最終目標であるといえる。逆にいえば、その地域に居住するための婚活支援事業であるともいえる。では、人々にこの選択をしてもらうために、自治体は何ができるのだろうか。この点について、2つの地域の取り組みから、人々のその地域への興味・関心の度合いに合わせた、婚活支援事業の取り組みを行っていくことが必要であると考えられる。それらを図に表したものが以下の第2図である。



第2図 婚活支援事業の4段階モデル

加西市の婚活支援事業では、まずパフォーマンス性のある取り組みや情報発信力のある支援事業が特徴であった。人々に、「一度聞いてみたい」と思わせたり、注目させたりするような事業を行って、とにかく加西市のことを人々が「知る」という部分からスタートしていると言える。これは、多可町に関するテレビ放映にも言えることであり、まず自分達の地域を頭の中に入れてもらうことが婚活支援を行っていく上で重要であるといえる。

次に、その地域を知ってもらった後は、その地域の自然や名産品などといった観光的な要素を持つアピールを取り入れた事業によって、その地域に対して、「知っている」だけではなく、「気になる」状態に持っていく。この部分については詳しく触れていないが、加西市の北条鉄道を用いた婚活イベントや、多可町における地元の名産品である杉原紙を用いた共同作業を行う婚活イベントがこれに当たる。このような観光的要素を取り入れたアピールを、婚活支援事業を通して行うことで、その地域にもう一度訪れたい、気になるという気持ちになるように誘導していく。

そして、「気になる」の次の段階はその地域のことを「好き」になってもらうことである。その地域の

ことが気になり、再度訪れた際には、地域の外見だけではなく、内面も知ってもらい、その地域ならではの人の温かさや、逆に深く踏み込まない人間関係を知ってもらうのである。多可町におけるおせっかいなおじさん・おばさんが介入する婚活イベントがこれに該当し、地域住民の雰囲気や人間関係のあり方を婚活イベントに組みこみ、「自分はこの地域に合っている」というその地域に対して「好き」な状態にさせることが重要である。

そして、最後の段階は「住みたい」であるが、これは前段階においてその地域のことを好きになった人々に対して、「この地域に住んだ場合、どんな生活が過ごせるのか」というビジョンを明確にさせること、地域に住むことへの利点をはっきりさせることが重要である。これは、加西市における新居見学を盛り込んだデートプランや、イオンでの家電割引、結婚補助金などが挙げられる。

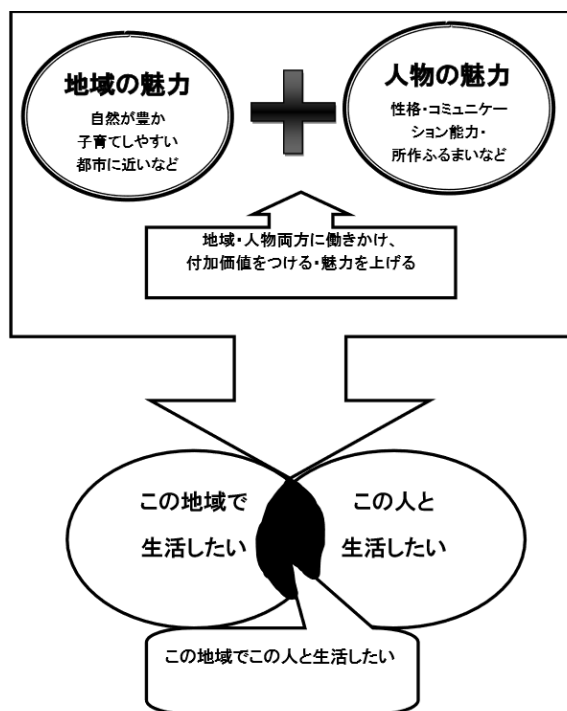
以上、これらの事業を、婚活支援を通して行い、上手く人々の中に入り込むことが出来て初めて、その地域に人が住むことになることを提言する。また、その地域が自分たちの地域に入れたいと思っているターゲットとなる状況の人々に対してこのようなアプローチの仕方を行うことも必要である。例えば、町

内に住んでいる人や周辺地域の人々に対して地域にやって来てほしいと考えているのに、自然や名産品をアピールしたとしても、既に知っていたり、環境が似ているために同じような自然がその地域にもあったりし、効果が見られにくいと考えられるからである。よって、ある程度のターゲットや目標を絞って、そこに対して的確に支援事業を行なうことがより成果がでると考えられる。

## (2)自治体の担う役割

婚活を行う男女に関して、その地域に住む選択をするには、その地域への魅力だけでは上手くいかないだろう。その人の結婚相手となるかもしれない人にも魅力があることは無論重要である。

よって、婚活を通してある地域に住むためには、その地域の地域としての魅力と、そこで出会った相手の人物としての魅力が関わると考えられ、その魅力をあげるためには、自治体による双方への働きかけが必要である。地域の魅力をあげるためには、その地域を詳しく知り、地域の観光政策も事業として行っている自治体が適任であろう。これは、先ほど述べた婚活支援事業の4段階にも関連し、その地域にある資源をいかに魅力的にみせるか、付加価値生み出せるかがその自治体の力量にかかっている。



第3図 婚活支援事業における自治体の役割

そして、人物の魅力については、加西市や多可町が行っていたスキルアップ講座のように、婚活に参加する人物の魅力を高める必要がある。これは、実際にカップリングパーティの様子を見て、異性間コミュニケーション能力の必要性を感じたためであるが、やはり婚活イベントにやってきても魅力的な人物がいなければ、もうその地域のイベントにはやってこなくなる可能性が高いからである。こういったスキルアップ講座は、利益追求を目的とする民間が行うメリットが少なく、また開催も断続的であるため、1度や2度の開催では受講者からすると、なかなか成果が見られない場合が多い。ここで自治体が、継続的なスキルアップ講座を行い、異性間コミュニケーション能力や魅力の向上を図ることで、よりその後のカップリングパーティが成果のあるものとなるのではないだろうか。実際に加西市や多可町においては、「講座を開いてほしい」という声があがっている。そして、地域としての魅力と、人物としての魅力を、婚活支援事業を通して高めることによって、「この地域で生活したい」、「この人と暮らしたい」、あるいは「この地域でこの人と暮らしたい」という人を増やすことが重要である。そして、婚活支援事業を通して参加者達をこれらのいずれかに該当させることが出来れば、将来住む地域の候補にはなりえるはずである。

「一緒に生活してみたい」と感じる地域や人物の魅力を磨いたり、その魅力をやってきた人にアピールしたりすること、これが自治体における婚活支援事業ならではの役割といえるのではないだろうか。

以上が、地域にあった婚活支援事業の取り組み方と、地域への定住を目指した婚活支援事業における自治体が果たすことのできる役割への考察結果である。

## 6. おわりに

本稿では、自治体の行う婚活支援事業を、現在婚活支援事業に力を入れて取り組んでいる2つの地域を取り上げ調査し、支援事業と地域の結婚や移住動向と合わせて考察することで、その地域に合った婚



活支援事業とは何かということについて検討し、また、婚活支援事業において自治体が果たすことのできる役割について述べることを目的とした。そして、それぞれの事例から人々の地域への興味・関心の度合いに合わせた婚活支援事業を、その地域に来てほしいターゲットの興味・関心や、自分達の地域に出来る範囲の支援で行うことの必要性を述べた。

また、地域の魅力だけでなく、婚活支援事業において出会う相手の人物としての魅力も磨くことで、その地域への定住の選択候補となりうるのではないかという推測も述べ、それらは地域をよく知っていたり、利益を求めすぎることなく継続的に人々のために活動が続けたりすることが可能である自治体だからこそ出来るものであることを示した。

しかし、地域への定住はこのような要素のみでなく、経済的な要因であったり、職業上の理由であったりと様々な要因が絡み合っただけで定住への決定を行う場合がほとんどであり、本稿で述べた部分だけでは、解決できない問題も多く存在するだろう。

本稿の調査では、地域住民へのアンケート調査において、職業や年齢といった属性の偏りや、調査数の少なかったことから、地域の結婚や出会いの変容についての特性をつかむことが不十分であったが、婚活支援事業自体も、近年の「婚活」ブーム等の流れによって活発になったものであり、まだまだ研究がなされていない部分も多く、今後も、様々な角度からこの婚活支援と人々の結婚や出会い、定住に関して研究することの必要性も課題である。

さらに、婚活支援事業は、取り組んですぐに結果が出るものではなく、男女の出会いのきっかけづくりという、結婚や定住といった、目的に向けた“スタート”の状況を生み出すものであるため、今後も継続的な調査をすることでさらなる地域の人口減少や少子化対策としての効果が見えてくるのではないだろうか。

## 付記

本論文は2013年1月に神戸大学発達科学部に提出した卒業論文に大幅な加筆修正を行ったものであ

る。論文を作成するにあたり、ご指導を頂きました指導教員の澤宗則教授に深謝いたします。また、貴重な時間を割いて聞き取り調査に協力していただきました加西市役所職員の阿部裕彦様、多可町役場職員の今中大祐様、ひょうご出会いサポートセンター職員の永園郁美様、アンケート調査やイベント参加にご協力していただいた加西市役所職員、多可町役場職員、商工会役員、社会福祉協議会職員の皆さまに感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

## 参考文献

- 相川良彦(2002)「農村の未婚晩婚化と親子2世代夫婦別居の現状」『農林水産政策研究所レビューNo.7』  
神原文子、杉井潤子、竹田美知(2009)『よくわかる現在家族』ミネルヴァ書房  
工藤豪 (2011)『結婚動向の地域性—未婚化・晩婚化からの接近—』人口問題研究 第67巻4号 pp.3-21  
黒須里美(2012)『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』麗澤大学出版会  
坂爪聡子(1998)配偶者のサーチモデルと晩婚化現象-恋愛結婚か見合い結婚か- 『経済論叢』162(4) pp.76-93  
佐藤博樹、永井暁子、三輪哲(2010)『結婚の壁—非婚・晩婚の構造—』勁草書房  
橘木俊詔(2013)『夫婦格差社会：二極化する結婚のかたち』中公新書  
松本隆史(2013)「主体から見た農村における結婚問題の構造」『尚絅大学研究紀要』人文・社会科学編 第45号 pp.35-49  
山田昌弘(2010)『「婚活」現象の社会学』東洋経済新報社  
山田昌弘(2007)『少子社会日本—もうひとつの格差のゆくえ—』岩波書店  
山田昌弘、白川桃子(2008)『婚活時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン

## 参考HP

加西市

<http://www.city.kasai.hyogo.jp/>

経済産業省 「少子化時代の結婚関連産業の在り方に関する調査研究報告書」

<http://www.meti.go.jp/>

国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向調査」

<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp>

総務省統計局 「国勢調査」

<http://www.stat.go.jp/index.htm>

多可町

<http://www.takacho.jp/>

地方自治体の婚活支援活動

[http://www.machicon-serch.com/pc/region\\_link.php](http://www.machicon-serch.com/pc/region_link.php)

p

内閣府 「平成22年度結婚・家族形成に関する調査報告書」

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/cyousa/cyousa22/marriage-family/mokuji-pdf.html>

兵庫県

<http://web.pref.hyogo.lg.jp/>

兵庫県市町要覧

<http://www.sichouyouran.jp/>

ひょうご出会いサポートセンター

<http://hdsc.seishonen.or.jp/index.php>

(いとう ゆき・神戸大学大学院人間発達環境学  
研究科博士課程前期課程)

